

太宰府市朝日山出土の層塔について

高橋 学

1. 対象について

・経緯

令和2年度に石造物研究会主催で開催が予定されていた第17回研究会において(註1)、「北部九州の層塔」というテーマを依頼されたため、令和2年6月から12月にかけて古代から近世初頭にかけての層塔を実見し集成並びに考察をおこなった。その際に過去に自分が携わった表題の層塔について再考する機会を得た。その成果を今回記述したい。他の資料と比較し、表題の資料を相対的に捉えて課題を抽出することを目的とする。

・資料

大宰府条坊跡第210次調査北地区表土出土石塔

この調査の対象地は、観世音寺の後背地であり、また字「御所の内」地区の後背地にあたる丘陵である。ここを宅地造成することを契機に行われた埋蔵文化財の発掘調査であった。丘陵自体はその大部分を昭和20年代に土取りにより大幅に削平され地形が変わっていたが、南側の斜面には遺構が良好に残存していた。調査範囲の北部の状況を確認するために、数カ所トレンチ(試掘穴)を設定して調査をおこなったが、この層塔はその調査の際に、発掘調査作業員により表採されたものである。正確な表採箇所は不明だがトレンチb～dあたり、北側の丘陵の尾根筋に近い場所で発掘調査に従事していた作業員から近くに転がっていたと報告があり、この層塔を受け取ったと記憶している。

以下、遺物観察は報告書(註2)から引用する。

「石塔(12) 北地区で表採をした石塔の一部で方形を呈す。層塔の一材と考えている。高さ17.5cm、横幅23.1cm、奥行き23.2cm(すべて残存値)を測る。石材は粘質土で軟質の砂岩。全体の2/3ほどが残存。現状の観察では、神・仏とみられる像が彫出されている面は3面確認できる。残り1面も像彫り出しに伴う方形彫り窪みが確認できるため、側面のそれぞれ4面には元々、像が彫られていたと考えられる。比較的残りが良い部位で観察をすると、像の彫出しに伴う方形の窪みは、左右6.5cm、上下2.5cmの空間をとるように割り付けられている。方形窪みはやや歪んでおり、下部の横幅は9.5cmだが、上部の横幅は10.2cmとやや上部が広い。彫り出しの深さは深い部位で2.5cm、浅い部位は0.03cm。像は坐像で、残りが良い面を例にとると、ゆったりとした僧衣のようなものを着用しており、両手を合わせている姿である。これらの特徴からは神像と推定できる。この面の反対の面の坐像は、残った所を観察すると、手は合わせておらず、右手と左手の位置はずれている。

この彫り込まれている像の特徴を、胸前で左手の人さし指を立てて拳を作り、その人さし指を右手の拳で包み込む智拳印と、頭上に宝冠を持つとみるならば、金剛界大日如来が考えられる。また、左手と右手が智拳印にしては離れすぎているとみると、左手に何かを持ち、右手は削れてしまっているとも考えることも可能である。すると、右手が施無畏印で左手に蓮華などを持っているようにも見える。それらの属性からは観音菩薩と推定ができる。残存が悪い面も像のシルエットから考えると、如来の可能性が高い。以上のように、層塔の4面に彫られてことから、如来四仏の可能性が高いと考えていたが、薩摩川内市指定文化財である薩摩国分寺層塔など、4面それぞれの尊格が統一されていない例もあるため、類例の調査など、今後の検討をしていくことが必要だろう。」と報告書には記載した。

2. 検討

この層塔（部材だが）について、報告書作成段階では近世のものではなくおそらく中世に遡るものとは考えたが、当時、層塔について十分な情報を集めるまで至らず、結果的には資料紹介にとどまったため今後の検討が必要と結んだ。当時の文章を見ると四面仏の像容から薩摩国分寺層塔と関連づけているのは意義深い（註3）。

前提として、この層塔部材は間層式層塔の部材で、高さが17.5cmと小振りのため、最上部の笠部を支える軸部と推定できる。柄はなく、平面形は四角と九州の層塔としてはオーソドックスなタイプである。これらの特徴からあまり大きな層塔の部材ではなく、おそらくは三層、ないしは五層の層塔と推定できる。また石材は報告書では砂岩としたが、改めて観察すると安山岩ないしは良質な凝灰岩と考えられる。別のアプローチとして、像容が彫られている層塔軸部の意匠に注目してみたい。南部九州の事例だが、層塔軸部意匠の時代的変遷が示されており（前川2018）、それによると隼人塚の層塔（平安後期）には、方形仏龕・両側に連子窓を作るが、永国寺層塔（嘉禄3年（1227））では方形仏龕のみとなり、さらに城泉寺層塔（寛喜2年（1230））には二重光背仏龕と変化し、栖本馬場層塔（14世紀前半）では舟形光背仏龕と変遷する。これに沿って考えると、朝日山出土層塔は永国寺層塔に近い時期、つまり13世紀前半までのものと一応の定点が押さえられる。また、筑前地域の層塔は基本、繁層式で地元の花崗岩ないしは砂岩を使用するため（註4）、間層式で安山岩ないし凝灰岩製のこの層塔は石材から見ても筑前地域のものではなく、他地域からの搬入品と考える（註5）。報告書での記載のとおり、四面仏の像容の特徴からも鹿児島県薩摩川内市薩摩国分寺層塔などとの共通点も多い。今後の課題として石材の産地同定、像容の特定などを進め、この層塔の位置づけを進めていきたい。

3. まとめ

北部九州の層塔は前述の研究会資料作成段階で91基を確認している。その中で筑前地域は13基だが、そのなかでもこの層塔は最古級のものと位置づけられる。改めてその価値が明らかになったことは、出土した大宰府の地でだけでなく、筑前地域全体を俯瞰しても、

製作地を含めて重要な層塔と位置づけることができた。

また報告書でも触れているが、この朝日山の地では、平安時代の墓（女性の墓と考えられる鏡や化粧道具類の出土）や観世音寺子院群と関係するような中世墓群、西大寺流律と関係すると推定した最福寺の奥の院および律宗系石塔（五輪塔）の出土、丘陵上にまとまった瓦の出土があり寺の建物の存在がうかがえる点や、丘陵を断ち切る巨大な堀、300枚の緞銭の出土など、非常に興味深い調査成果が集中している。層塔も含め、この魅力的な朝日山周辺地を大宰府の中世歴史のなかで位置づけて、古代だけではない大宰府の中世について注目し、歴史叙述を進めていくのが今後の課題として明らかになったところで、筆を擱くことにする。

最後になりましたが、長きにわたり太宰府市の市史作成および公文書館での業務にご尽力された朱雀信城氏に対して、心からの感謝を送りたいと思います。個人的には困ったことがあればいつも朱雀さんを頼ってしまい、そんな自分に対して研究者として温かくも厳しいご指導・ご鞭撻して頂いたことが忘れられません。ありがとうございました。朱雀さんから受け取ったものを大事にして、少しでも太宰府市のために、文化財、文化遺産、そして歴史を未来へ伝えていきたいと考えています。本当にお疲れ様でした。

註

- 1) 残念ながら新型コロナウイルス感染症の拡大のため、令和3年1月開催が6月に延期された。全国的な視野で古代～中世の層塔を扱う研究会になる予定である。
- 2) 太宰府市教育委員会編 2013 を参照にして頂きたい。
- 3) 九州歴史資料館 井形進氏のご教示による。
- 4) ただし、南宋時代と推定されている福岡市恵光院層塔は中国からの輸入品、鎌倉後期とされる太宰府市般若寺跡七重塔（本御影製）は関西からの搬入品である。つまり確実に筑前地域で製作されている層塔は古い段階にはない。北九州市八幡西区聖福寺層塔が花崗岩製で、14世紀前半と推定されているが、私見では時期が下る可能性を考えている。
- 5) 現時点では南部九州からの搬入品の可能性が高いと考えているが、石材が安山岩であれば、肥前や豊前でも類例があるため、今後も検討を続けていきたい。

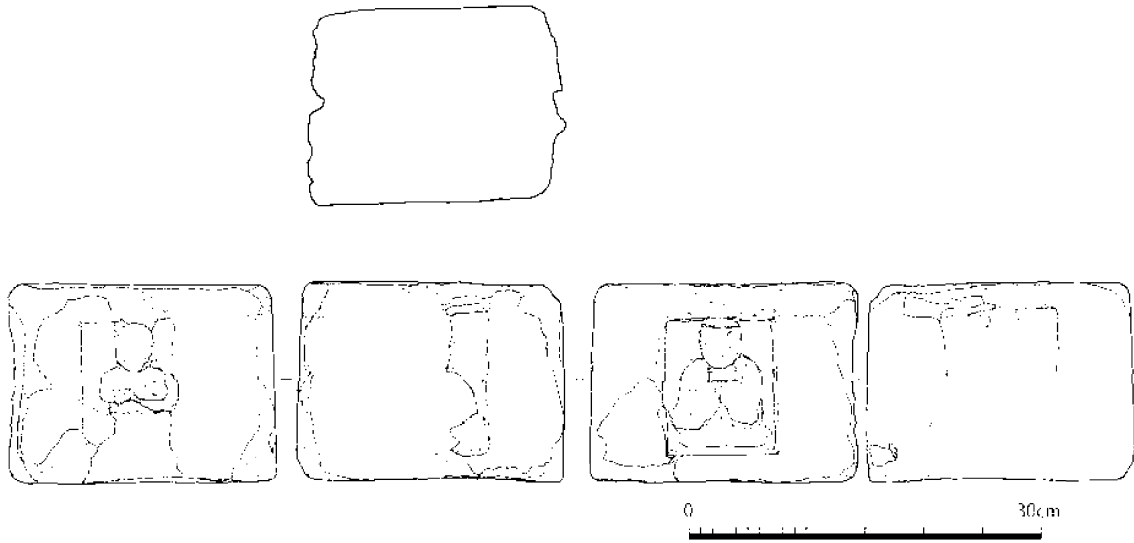
参考・引用文献

太宰府市教育委員会編 2013 『太宰府市の文化財代 116 集 大宰府条坊跡第 43 ー大宰府条坊跡第 193. 210. 210-2. 283. 284 次調査、山ノ井遺跡第一次調査』太宰府市教育委員会

前川清一 2018 「小池遺跡と周辺の石造物（層塔）について」『熊本県文化財調査報告第 330 集 小池遺跡・秋永遺跡』熊本県教育委員会

高橋学 2021 「九州北部の石造層塔」『第 17 回石造物研究会資料』石造物研究会（刊行予定）

（たかはし・まなぶ 太宰府市教育委員会文化財課）



朝日山出土層塔（大宰府条坊跡第 210 次調査表土出土遺物実測図（S=1/6）報告書から引用



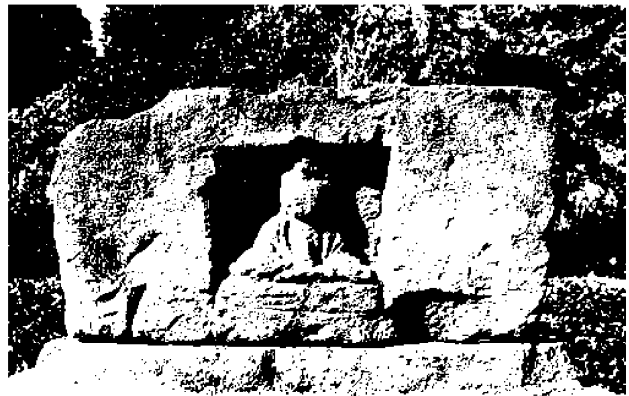
朝日山出土層塔塔身画像①(報告書)



朝日山出土層塔塔身画像②報告書)



参考画像：薩摩国分寺層塔（中央塔）
撮影筆者



参考画像：薩摩国分寺層塔（中央塔）
三層目塔身 撮影筆者

図版 朝日山出土層塔ほか

朱雀信城先生退官記念献呈文集

令和三年三月三十一日

太宰府市文化財課有志の会